2024年3月24日
受難週主日礼拝説教要約

主がなさった不思議

（マルコ11・1～11）

一、神がなさる不思議

紀元30年のこと、主イエス・キリストは十字架にかかられました。十字架にかかられた「週の初めの日」、すなわち日曜に、エルサレムに入られました。

1節をご覧ください。〈さて、一行がエルサレムに近づき、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに来たとき、イエスはこう言って二人の弟子を遣わされた。〉とあります。弟子の名前は分かりません。

主は次のように言われました。2節です。〈「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。〉と。ここに主イエスは、時々現される神性を現しておられます。それはともかく、つながれている子ろばをほどいて引いて来るのは、そのまま行えば窃盗になります。もちろん主イエスは、そのことをご存じでした。ゆえに言われました。3節です。〈もしだれかが、『なぜそんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐに、またここにお返しします』と言いなさい。」〉と。

その先を見てまいりましょう。4節、5節です。〈弟子たちは出かけて行き、表通りにある家の戸口に、子ろばがつながれているのを見つけたので、それをほどいた。すると、そこに立っていた何人かが言った。「子ろばをほどいたりして、どうするのか。」〉と、予測したとおりになりました。そして6節です。〈弟子たちが、イエスの言われたとおりに話すと、彼らは許してくれた。〉と。〈彼らは許してくれた〉に、読者である私たちは、これは主の御手の中で起きている出来事であると、そう受け止めるわけです。その通りです。

二、主がなさった不思議

7節を見てまいります。〈それで、子ろばをイエスのところに引いて行き、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。〉とあります。キリスト教会は、マタイの福音書で解説されていますように、主が預言者を通して語られたことが成就するためであったと読むので、ここにメシアの姿を思い浮かべることでありましょう。ですが、見方によっては、滑稽な、みすぼらしい、パロディ（＝風刺画）のように見えませんか。イエスは、神の王国の王なるお方です。王は、普通なら馬に乗って登場します。馬には、鞍が乗せてあります。ところがイエスが乗られたのは、馬ではなく子ろばでした。しかも子ろばは、ご自身のものではなく、借りものでした。さらに、鞍の代わりに乗せたのは、弟子たちの上着でした。

続いて、8節をご覧ください。〈すると、多くの人たちが自分たちの上着を道に敷き、ほかの人たちは葉の付いた枝を野から切って来て敷いた。〉とあります。〈多くの人たち〉は、数日後には、だれかが「イエスを十字架につけろ！」と叫べば、「そうだ、そうだ。十字架につけろ」と叫んだ一般民衆でした。そう考えますと、〈多くの人たちが自分たちの上着を道に敷き、ほかの人たちは葉の付いた枝を野から切って来て敷いた〉は、それ自体としては、ほとんど意味のない出来事であったことになります。むしろ空しささえ感じさせられる出来事です。

イエスが何者であったのか。それは、聖書によらなければ分からないことです。その点、マルコの福音書はやや物足りなかったと思われます。9節、10節に、次のように書かれています。〈そして、前を行く人たちも、後に続く人たちも叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。祝福あれ、われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ、いと高き所に。」〉と。マルコは、人々が詩篇のことばを引用してイエスをたたえたと記しています。ですが、多くの人たちがイエスをたたえたことに強調点をおくと、読み誤ることになると思います。この点マタイは、しっかり記しています。主イエスが子ろばに乗ってエルサレムに入城されたのは、メシアについて、預言者ゼカリヤが預言したことばが成就したのであると。そうです。イエスが何者であったのかを知るためには、旧約から紐解いて行く必要があるわけです。

三、聖書によってキリストを知る

皆さまは「主イエス・キリスト」と聞いて、どのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。「全人類が受けなければならない、聖なる神からの、罪に対するさばきをすべて受けてくださり、呪われた者として死んでくださり、陰府に下り、三日目に全能なる神によって復活させられた御子なるお方」でしょうか。その通りです。使徒信条でも告白しているとおりです。

では、復活させられ、天に上げられ、全能なる神の右に座しておられるお方はどのようなお方でしょうか。ヨハネの黙示録に主イエス・キリストの姿が出てまいります。ヨハネが天上界に上げられた時の光景です。次のように記されています。〈黙示録5・6～9〉とあります。

主イエス・キリストは贖いのわざを成し遂げて、父なる神の右に座しておられます。同時に、主イエスは永遠に私たちの罪のために屠られたお方です。